

その他

医学用語 歯牙・歯牙年齢の正当性を擁護する

その一. 齢の中になぜ歯が含まれているのか

藤田 浄 秀¹⁾, 座間 正 和²⁾, 李 憲 起³⁾

1, 2) 逗子病院 1) 内科, 2) 放射線科

3) 松本歯科大学 口腔顎顔面外科学講座

Key words: 医学用語, よわい, 歯, 齢, 歯牙, 歯牙年齢, 歯年齢, 歯齢

I. 諸 言

歯を意味する「歯牙」は、久しく医学用語として用いられて来た。歯牙が歯を意味する事には何の疑義も無かった。

ところが、特に平成十年頃よりヒトの口腔内には「牙」は無いので歯を歯牙と呼ぶのは間違いであり、歯牙から牙を取り除いて歯牙は単に歯と呼ぶべきであるとする考えを仄聞する様になった。

しかし、記憶を辿ってみても、ヒトの口腔内にある歯牙を単に歯と呼ぶべきであるとする意見が関係する学会で正面切って論じられた事は無いと思われるし、日本口腔外科学会雑誌の投稿規程を除けば、関係する学会の見解で歯牙を歯に変更する旨の告知を見た事は無い。それにも拘わらず、次第に学術論文や学術書で、かつて「歯牙解剖学」「歯牙外傷」「歯牙破折」「歯牙形態異常」「歯牙位置異常」「歯牙年齢」.. 等と表記された用語が、「牙」を取り去って「歯の解剖学¹⁾」「歯の外傷」「歯の破折」「歯の形態異常」「歯の位置異常」と表記されたり「歯年齢・歯齢²⁾」と表記されたりする様になって来た。今尚「歯牙」は用いられているが、歯牙歯肉境・歯牙歯肉線維・歯牙骨膜線維・歯牙分割・歯牙エナメル上皮腫・歯牙腫²⁾、歯牙結紮法,.. 等数少なくなっていると思われる。

しかし、ヒトの口腔に本当に牙は無いと言えるだろうか。歯牙は本当に不適切な用語なのであろうか。「歯牙年齢」を「歯年齢」や「歯齢」の用語²⁾に変更する事は適切なのであろうか。いかなる根拠に基づくものなのであろうか。

筆者等は、歯を「歯牙」と記載する事は誠に適切であり、従って歯牙年齢は従来通り「歯牙年齢」と表記する事が適切であると考え、医学用語 歯牙・歯牙年齢を擁護したい。

本稿では、歯(齒)の文字の起源から始め、歯の有する意味の変遷を追い、その結果新しい意味に適合した新しい漢字誕生と熟語「年齢」の成立の道筋を簡単に追いかけてみたい。

「歯牙」に関しては稿を改めて「その二。」で検討したい。

II. 漢字の構造

漢字の起源と漢字の変遷を論ずる際に必須なので、ここで漢字の構造について簡単に述べたい。

許慎は「説文解字」の中で、漢字を(一)象形、(二)指事、(三)会意、(四)形声、(五)転注、(六)仮借の六種に分類した。これを「六書」と言う^{3, 4)}。

(一)象形は、日・月・人・木... 等の様に事物の形に象った簡略化した絵文字であり、他の漢字の偏や旁・冠・脚・垂・構・繞等の部首に成って文字構成上基本的な働きをする。

(二)指事は、絵として描きにくい事物の位置・数量・性質等の抽象的概念に象形を基にして点画を増減する事により示した文字で、一・二・三・上・下... 等である。

(三)会意は、象形文字や指事文字等、既成の文字二つ以上を組み合わせた文字である。例えば、信(人+言)・武(戈+止)... 等である。

(四) 形声は、意味を表わす文字(意符)と発音を表わす文字(音符)を組み合わせた文字で、全漢字の八割以上がこれにあたる。例えば、胴・肺・脾・肝・膀・胱・腺・臓…等は月(にくづき)が肉体を意味するので、我々が知る通り臓器名の意符となる。筒・洞・洞・桐・銅…等は旁の「同」が意符(発音はトウあるいはドウ)で「中が空洞」を意味し、筒は竹のくだ、また、円柱状で中が空になっているくだを意味し、胴は剣道の防具の胴の様な中が空のくだであり、その中に心臓や肺・肝臓…等の臓腑が収まっている事を意味し、洞はうつろな穴を意味し、桐は幹が中空になった木を意味し、銅は銅製の容器の中ががらんどろである事を意味する。

(五) 転注は、原義から転義したもので、楽(音楽)を意味する語が楽(楽しい)を意味する語に変わり、更に楽(好む)(古くはゴウの音があり、好むの意味に用いたが、今は用いない⁴⁾)に変わり、令の様に命令を意味する語が、法令を意味する語に変わり、やがて命令を出す人(県令=長官)に変わる等がこれに該当する。

(六) 仮借は、ある語を表わす本来の字がない場合、意味に関係なくその音だけを用いた文字で、ぎざぎざの刃のついた戈を描いた我を一人称代名詞の「が」に当てる様に、同音の当て字の事である。阿弥陀・巴里、あるいは外国語の音訳がこれにあたる。

(一)～(四)は造字法であるが、(五)(六)は運用法である。

Ⅲ. よわい [齢・齒]

国語辞典で「よわい」を引いてみると、よわい【齢・齒】が立項されているので「齒」が「よわい」と読まれる事が知られる⁵⁾。筆者等は、実際には「私、^{よわい}齒七十九歳になります」の様に「よわい」、すなわち年齢を「齒」で記述した文章を目にした事は無いが、国語辞典に拠れば「齒」が「よわい」と読まれ、齢と同様に年齢を意味する事が知られる。すなわち、齒は「は(tooth)」を意味する他に「よわい(age)」を意味する事が分かる。どうして齒が「よわい」と読まれ、齢すなわち年齢を意味するのかを知る為に齒の文字の起源と、その意味並びにその変遷を探ってみたい。

Ⅳ. 字体の変遷^{3, 4)}

漢字の字体は、甲骨文→金文→篆書→隸書→楷書・行書・草書と変遷した。

中国最古の文字は、亀の腹の甲羅(亀甲)や動物の肩甲骨(獣骨)に鋭い刃物で刻みつけられた文字で、これを「甲骨文(甲骨文字)」と言う。漢字の字体の原型は甲骨文字である。

次に古いのは、殷や周の青銅器に鑄造されたり、あるいは彫みつけられた銘文の文字で、古くは銅を金と呼んだので、これを金文または金石文と言う。前七世紀以降、周王朝が衰え地方豪族が武力を争う春秋・戦国時代になると、豪族の占拠する都市国家間で多少ずつ形の違った文字が用いられた。その中の一つが「大篆」である。

紀元前三世紀、秦の始皇帝が初めて全国を統一したが、統治の一環として「小篆」という字体を制定して統一を図った。大篆と小篆とを合わせて「篆書(篆文)」と言う。今日、篆刻をする人が印材に彫り付ける模様風の字体である。

秦が全国に渡って官僚組織を整備させた結果役人の取り扱う文書量が多くなると、余りに装飾的で書きにくい篆書はあっさりとして直線状に簡略化されて「隸書」が派生した。「隸」とは上役に隸属する下級の小役人(隸吏)の意である。

更に実務能力を上げる為に隸書を素早く書く事で「行書」や「草書」が現れた。

三国から六朝にかけて、隸書から直線化した四角い形の「楷書」が派生した。「楷」とは「きちんと整った」という意味である。

Ⅴ. 齒(齒)の文字の誕生とその意味の変遷

齒の文字の誕生とその意味の変遷を述べるにあたり、漢字の読み(音訓)、すなわち音読(音読み)と訓読(訓読み)について触れておきたい。

中国から伝来した漢字の原音を日本風に発音した読みを「音読み(音読)」と言い、先ず日本語(やまと言葉)が有り、そのやまと言葉に対応する漢字を充てた翻訳読みを「訓読み(訓読)」と言う。以下、音訓を明確にする為に漢字の読みに振り仮名をする際に、音読みには片仮名を、訓読みには平仮名を用いる事にする。

齒の旧字は齒である。以下、地の文章では齒を用いるが、文脈によって齒と齒とを使い分ける。

大きく開けた口から何本かの「は」が見える様子を象って象形文字(甲骨文字)の「は」が作られた(図1)。篆文ではこれに音符の「止」が加えられて齒が「は」の文字となった。初めは齒は「は」のみを意味したが、ヒトを含めて齒の萌出状態から動物の年齢が分かる事から、次第に齒は「よわい=年齢」の意味にも使われる様になった。齒の萌出状態によって知りうる「年齢」から、後に「齒牙年齢」なる医学用語が生まれた。

ここに至り、齒は一つの文字で、①口腔内にある本来の「は(tooth)」の意味と②「よわい(age)」の意味との二つの意味を有する事となった(実際にはもっと多数の意味を有するが、本稿では二つに止め置く事にする)。同じ文字である「齒」が二つの意味を持つ事になれば両

<p>齒 12画 (齒) 15画 はシ はよわい</p>	<p>甲骨1 甲骨2 金文1 篆文1</p>	<p>解説 形声。もとの字は齒に作り、音符は止。その下部は齒の並んでいる形であり、「は」をいう。甲骨文字には音符の止はなく、齒の形の象形の字である。殷の時代からすでに齟の字があり、齒の間に虫を加えている。また甲骨文に「齒を疾むことあるか」と占っている例もある。動物の齒は齒によってその年齢を知ることができるので年齒(年齢)といい、齒を「よわい、年齢」の意味にも用いる。七十歳の者に天子が賜う杖を齒杖といった。</p> <p>用例 歯牙 齒と牙。また、齒。牙も齒の意味。問題にすることを、歯牙に懸けるといふ。齒徳 年齢と徳行。義齒 入れ歯。乳歯 生後六か月ころから生え始め、十歳前後までに抜けかわる齒。</p>	<p>齡 17画 (齡) 20画 とレイ</p>	<p>齡 篆文1</p> <p>解説 形声。もとの字は齡に作り、音符は令。「説文新附」二下に「年なり」とし、「字林」に「年齒(とし)なり」とあり、「とし、よわい」の意味に用いる。獣畜の類は、齒をみて容易にその年齢(とし)を知ることができるので、齒(齒)を字の要素として含んでいる。人の年齢も、幼いときには齒によって知ることができた。</p> <p>用例 高齢・頽齡・老齡 年老いていること。弱齡 年齢が若いこと。樹齡 樹木の年齢。馬齡 自分の年齢をへりくだっていう語。</p>
---------------------------------------------------------	------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

図1 齒並びに齡の文字の誕生 文献6)より引用.

左：齒から齡への変遷

右：甲骨文字から齒への変遷

者を区別して書き分けたいくなるのは当然の道理であろう。前者、すなわち口腔内にある「は」は、「齒」と同じ意味を有する「牙」と組み合わせる「齒牙」の熟語が使われ、後者、すなわち「よわい」は、先ず、齒に音符<令(レイ)>を加えた齡が専ら“年齢”の意味に用いられる様になり(図1)、次いで「齡」と同じ意味を有する「年」と組み合わせる「年齢」の熟語が使われる事となった。

ここで述べている事を理解が容易な様に視覚的に示せば以下の通りである。

- ① 齒(口腔内にある「は」) ⇒ 齒牙
- ② 齒(よわい) ⇒ 齡 ⇒ 年齢

我々は年齢の意味を既に理解している。この我々の理解している年齢をひとまず“年齢”とし、既に上でも用いたが便宜的に“年齢”を用いて「齡」から更に「年齢」の熟語が成立した経緯を述べたい。“年齢”を用いて年齢の成立を論ずる事は極めておかしいのであるが、この様にする理由は、“年齢”を用いずに年齢の熟語の成立を論ずる事は極めて困難と知ったからである。

先ず、「年」の由来と「年齢」の熟語の成立について述べたい。

年の象形文字は、実った穀物の穂を人が背中にかついでいる形に象った文字で、本来は「農作物の豊かな収穫」、すなわち「みのり」を意味する文字であったが、農作物の収穫が年に一度だけのことから、後に「一年」という時間の単位を表わす様になった⁷⁾(図2)。ここから同じ意味を有する「年」と「齡」を組み合わせる「年齢」の熟語が生まれた。

この様に漢字の持つ新しい意味に即して字体が変遷する事は特に珍しい事ではない。以下に、二つの例を示す。

鼻は、初めはヒトの「はな」を正面から見た形に象った象形文字「自」であった(図3)。しかし、ヒトが身振り手振りて自分を表わす時に右手の人差し指で鼻の頭を指す仕草をする事から次第に「自分」という意味を表わす様になった。「自」を「自分」の意味で使う事が主流になったので、「自」に発音を表わす音符「畀(ひ)」を加えた「鼻」が「はな」を表わす様になった⁷⁾。

杜甫の絶句(図4)に「山青くして花然えんと欲す」と、「然」を「もえる」と読ませている。当時まだ「燃」の漢字は存在しなかった。「然」は「灃=れんが」が火を表わし、犬の肉(月=にくづき)を下から火であぶっている文字なので、「もえる」を意味したが、後に更に火を加えた「燃」が専ら「もえる」意味に使われ、「然」は「然り」や「自然」「天然」等の然に使用される様になった。

VI. 同じ意味の漢字の組み合わせ

漢語では通常、名詞や動詞は漢字一字を用いるよりも二字以上の熟語として用いられる事が多い。同じ意味を有する漢字を組み合わせる熟語にすると、その意味するところが一層明確になり、他の意味に誤解される事が無くきっちりと意味が確定する。また、一字よりも熟語の方が安定感がある。これは漢語の大きな特徴である。「よわい(age)」が齒から齡に、更に齡から年齢に至



年



【音読み】ネン 【訓読み】とし／よわい 【意味】①とし。もとは穀物の実りから次の実りまでの間。のち三六五日余をいう。②よわい。年齢。「年少」【解字】象形。実った穀物の穂を、人が背中にかついでいる形にかたどる。本来は「農作物の豊かな収穫」、すなわち「みのり」を意味する文字だった。農作物の収穫が年に一度だけのことから、のちに「一年」という時間の単位を表すようになった。

図2 年の文字の誕生 文献7)より引用, 一部改変。
甲骨文字から年への変遷



鼻



【音読み】ビ／ヒ 【訓読み】はな／はじめ 【意味】①はな。顔の中央にあって、息をしたり、においをかいだりする器官。②はじめ。最初のもの。「鼻祖」【解字】はじめは「自」と書いた。「自」は象形。人の鼻の頭を正面から見た形にかたどる。もと「人の鼻」の意。人が身振り手振りて自分を表す時に、右手の人差し指で鼻の頭を指すしぐさをすることから、やがて「自分」という意味を表すようになった。「自」を「自分」の意味で使うのが主流になったので、「自」に発音を表す「鼻」(ヒ)を加えた「鼻」で「はな」の意味を表すようになった。また鼻が人体の先端につき出ていることから「はじめ」の意を表すようになった。

図3 鼻の文字の誕生 文献7)より引用, 一部改変。
甲骨文字から自へ、自から鼻への変遷

る過程は、熟語を理解する上で非常に重要な示唆を与える。「齒」が意味する①口腔内にある「は (tooth)」と②「よわい (age)」のうち、後者の「よわい」は「齢」の形声文字によって充分役割を果たしていると思われるが、更に齢と同じ意味を有する「年」と組み合わせる「年齢」とする事によって「よわい」の意味をより一層確固たるものにし、「年齢」は「年齢」しか意味せず、他の意味に誤って受け取られる可能性は無くなった。

同じ意味の漢字を組み合わせることでしっかりと意味を確定する熟語は漢語の注目すべき特徴である。

例を挙げると以下の通り、

- 関係・開拓・摂取・合併・疾病・表現・陳述・過誤・
- 守護・準備・停止・充当・戦闘・遭遇・会合・破壊・
- 使用・製造・選択・計測・完了・探究・離別・喚呼・
- 削除・救助・携帯・支持・繁栄・温暖・寒冷・暑熱・
- 睡眠・覚醒・弛緩・詳細・疼痛・痒痒・恒常・誠実・
- 緩徐・普遍・空虚・安易・均等・激烈・乾燥・湿潤・
- 柔和・希少・貧乏・簡単・急速・河川・創傷・波浪・
- 生活・樹木・悲哀・依拠・増殖・経歴...

等がある。

同じ意味の漢字を組み合わせた熟語であるから、しっかりと漢語の意味が確定する事が分かる。

漢語が同じ意味の漢字の組み合わせから成るのに対して、やまと言葉(日本語)の場合は、先ず言葉が有りその言葉に対応する漢字を一字選んで漢字に置き換えたもので、一字しか選べない。やまと言葉の「は」には漢字の「齒」が対応すると知って「訓読み」で「齒」を選び

取ったのである。漢字二字(熟語)を選び取ると同時に「訓読み」でやまと言葉に置き換える事は出来ない。例を挙げて述べると、漢語の「関係」、例えば「両者の関係」は、やまと言葉では漢字の一字を選んで「訓読み」で「両者のかわり」または「両者の係わり」と成るが、漢字の一字を選んで「音読み」で「両者の関」「両者の係」と用いられる事は無い。全く同様に「荒野を開拓する」は訓読みで「荒野を開く」または「荒野を拓く」と成るが、音読みで「荒野の開」または「荒野の拓」とは成らず、「温暖」ならば「暖かい」あるいは「温かい」と成るが、「温暖化」が「温化」あるいは「暖化」の様に漢字熟語の一字を「音読み」で日本語の文章中に使用する事は通常無い。

漢字熟語の変遷としては、「齢」の一字から「年齢」の二字にする事によってしっかりと意味を確定したものである。もし「年齢」を切り離して「齢」のみを使用する際には「齢」の一字のみが使用される事は無く、加齢・老齢・高齢・壮齢・若齢・学齢・同齢・妙齢・適齢・延齢・余齢・樹齢・船齢・車齢・蚕齢・馬齢...等の様に別の熟語を形成する。従って、「歯牙年齢」の「歯牙」は音読み「齒」の一字で充分、「年齢」は音読み「齢」の一字で充分であるとして、「歯牙年齢」を「齒年齢」あるいは「齒齢」と縮約する事²⁾は論外ではないかと思われる。あたかも「関係」を「関」あるいは「係」に縮約して使用している様なものである。更に国語辞典⁵⁾では、よわい【齢・齒】と立項されている。「歯年齢」では「よわい・年齢」とも読めるのであり、「齒齢」では順序こそ

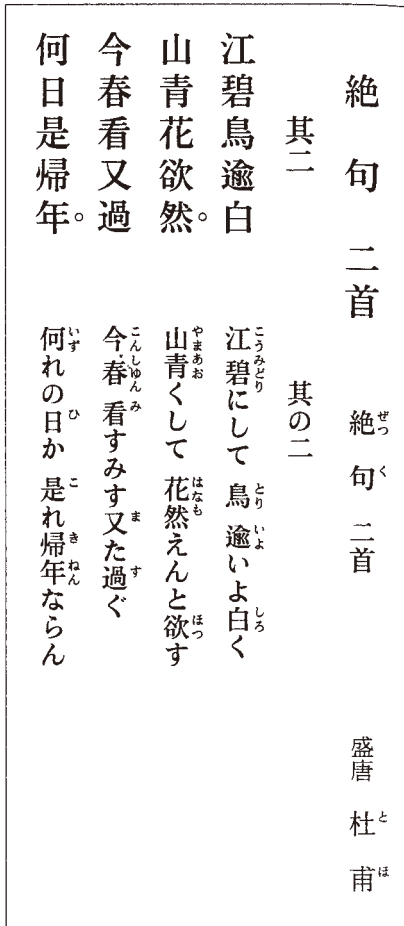


図4 然から燃への変遷（漢字の変遷）
杜甫の絶句より然（もえる=燃）の使用例

違い、正に「よわい・よわい」とも読めるのである。勿論この様な読み方をする者は皆無であろうが、学術用語は誤解される事無くきっちりと意味が確定されたものでなければならず、曖昧なものであってはならない。

上に「樹齡」・「船齡」・「車齡」を挙げた。「○齡」となっているので、一見すると「齒齡」も無理のない縮約の様に見えるかもしれないが、前者は「経過年数」を意味しているのに対し、後者の「齒齡」は「歯牙の萌出後の経過年数」ではなく、「歯の萌出状態から知りうる年齢」、すなわち「歯牙年齢」を縮約した用語だとすればその意味が全く異なるのである。「齒年齢」「齒齡」の縮約は不適切と思われる。

表現力の乏しさから筆者等が言わんとしている事が伝わらず、御理解頂けていないかもしれない。思い切って「年金受給開始年齢」を例にして再度繰り返して述べたい。年金受給の「開始年齢」は、「開始」は「始」の一字でも充分であるから「始年齢」に縮約出来る、「年齢」も「齡」の一字で充分であるから更に「始齡」に縮約出来る、あるいは年金の「受給年齢」は、「受給」は「受」の一字で充分であるから「受年齢」に縮約出来る、「年齢」

も「齡」の一字で充分であるから更に「受齡」に縮約出来る、最終的に「開始年齢」は「始齡」、「受給年齢」は「受齡」で問題ないとは誰も考えないであろう。このような縮約が将来定着するとは考えられない。漢字熟語の漢字一字のみを用いるのは、やまと言葉からの発想である。

再度上記の「関係」や「開拓」等の漢語の「訓読み」と「音読み」との違いに関する記述を読み返して頂ければ、筆者等が言わんとしている事を御理解頂けるのではないかと考える。やまと言葉の発想で、漢語の熟語を安易に漢字一字でも充分であると考えた事は誤りである。

全く同様に「歯牙年齢」を「齒年齢」、更に「齒齡」に縮約する事²⁾は学術用語としては不適切である。何故なら、学術用語は多義的にならぬ様にきっちりと意味を確定し、他の意味に受け取られる事のない様な漢字の組合せによる漢字の熟語である事が必要であるからである。歯牙は「齒牙」、歯牙年齢は「齒牙年齢」が適切な学術用語ではないであろうか。

学術用語集 歯学編²⁾は、いかなる経緯で歯[年]齡 dental age を収載したのであろうか。

VII. 学術用語と漢字の熟語

学術用語は、今や日本語と成っている漢字の熟語から成り立っているものが圧倒的に多い。学術用語は多義的で紛らわしいものであってはならない。表意文字である漢字の組み合わせは、豊富な内容を盛り込み明快且つ確固たる用語を造る事が可能である。きっちりと意味を確定する為に同じ意味の漢字を組み合わせる事から、屋上屋を架すの感が無きにしも非ずであるが、これが漢語の熟語の特徴である。従って、既に出来上がった学術用語を、例えば疼痛は「痛」のみで充分、痒痒は「痒」のみで充分、歯牙は「齒」のみで充分、年齢は「齡」のみで充分の様に確たる根拠無しに不用意に漢字一字に縮約する事は厳に慎むべきである。

更に繰り返しになるが、「齒」は口腔内にある「は」と「よわい」とを意味するが故に多義的と成った。IV. で述べた様にその差異を明瞭にする為に「齒牙」と「年齢」の熟語が生まれたのである。それにも拘わらず一千年・二千年に渡る「齒」の文字の変遷と熟語形成過程とに逆行して「齒牙」を「齒」に、「年齢」を「齡」に差し戻す事は間違いと思われる。

VIII. 結 語

医学用語、すなわち学術用語は多義的で曖昧なものであってはならない。きっちりと意味が確定されている事が大切であり、他の意味に誤解されるものであってはならない。表意文字である漢字を組み合わせた熟語は豊富

な内容を含み得るので、学術用語には漢字の熟語が多く用いられる。

歯は、当初は口腔内の「は」を意味したが、次第に「よわい」をも意味するようになった為多義となった。この事から前者の「は」は同じ意味を有する「牙」と組み合わせる事によって熟語「歯牙」となった。後者の「よわい」は、「齢」の漢字を経て、これも同じ意味を有する「年」と組み合わせる事によって熟語「年齢」となった。これにより両者の意味ははっきりと確定され「歯」の多義性は完全に解消された。

この様に「歯」が「歯牙」と「年齢」へと変遷した過程に逆行して、軽々に「歯牙」は「歯」の一字で充分、「年齢」は「齢」の一字で充分と考える事は、一千年・二千年に渡る漢語の変遷過程を完全に無視したものであって、筆者等はどうてい容認する事は出来ない。

学術用語としては、従来通り歯牙は「歯牙」、年齢は「年齢」、従って、歯牙年齢は「歯牙年齢」のまま使用するべきであると考え。

筆者等は、医学用語 歯牙・歯牙年齢の正当性を擁護したい。

文 献

- 1) 藤田恒太郎 原著 桐野忠大, 山下靖男 改訂: 歯の解剖学, 第22版. 金原出版, 平成9年1月.
- 2) 文部省 日本歯科医学会 編: 学術用語集 歯学編 (増訂版). 口腔保健協会, 平成4年11月.
- 3) 谷山 茂, 猪野謙二, 村井康彦, 本多伊平 共編: 新版国語総覧, 第3刷. 漢字と部首. 318~319頁. 京都書房, 1995年3月.
- 4) 藤堂明保, 松本 昭, 武田 晃, 加納喜光 編: 漢字源 改訂第4版, 付録. 漢字の造字法, 1867~1868頁. 学習研究社, 2007年1月.
- 5) 新村 出 編: 広辞苑, 第七版 一刷. 岩波書店, 二〇一八年一月.
- 6) 白川 静 著: 常用字解, 初版第二刷. 平凡社, 二〇〇四年一月.
- 7) 阿辻哲次 著: 漢字の知恵. ちくま新書. 筑摩書房, 二〇〇三年一二月.